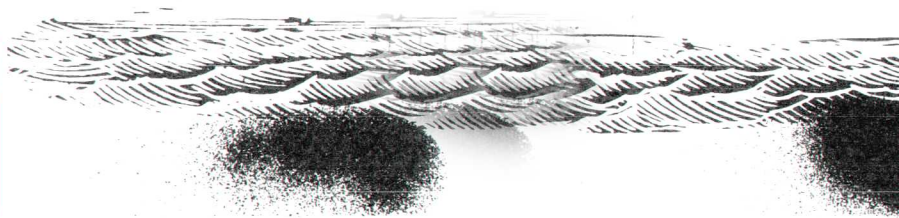


南風のさそい

島尾敏雄

南風のさそい

島尾敏雄



泰流社



南風のさそい

発行——昭和五十三年十二月十二日 第一刷

定価——一五〇〇円

著者——島尾敏雄

発行者——西村允孝

発行所——泰流社

本社 112 東京都文京区小日向二—一八—四

編集部・営業部 160 東京都新宿区南元町一〇

電話 〇三(三五五) 五〇五三——営業

〇三(三五七) 六五五六——編集

振替 東京 〇——一六三七六五

印刷所——誠之印刷株式会社

装幀者——秋山法子

編集者——高橋 徹

© by Toshio Shimao, 1978

Printed in Japan

0095-10021-4447

南風のさそい 目次

I

想像力を阻むもの……………	二
私の中の日本人——大平文一郎——……………	六
カフカの癒やし……………	三

II

中島敦と南島……………	四七
夢野久作の甦り……………	五一
私の埴谷体験……………	五三
埴谷さんとのつき合い……………	五九
武田泰淳さんの存在……………	七二
武田百合子「富士日記」下 帯文……………	七五
奥野健男著作シリーズ推薦文……………	七六
奥野とのつき合い……………	七八
小川国夫「アポロンの島」解説……………	八二
「夢と現実」後記……………	八四

工藤幸雄「ワルシャワの七年」推薦文……………	八六
「つげ義春作品集」——私の好きな本……………	八七
「つげ義春とぼく」書評……………	八九
井上岩夫「大島逯小説集」推薦文……………	九二
前山光則「この指に止まれ」帯文……………	九三
J・ドロール「マルコス福音書の読み方」推薦文……………	九四
南島の夜は深々……………付記——橋川文三氏との対談について……………	九四
南島世界を見た私——中上健次氏との対談を終えて……………	九七
特攻隊体験——吉田満氏との対談について……………	一〇〇

III

琉球文学事始め……………	一〇五
琉球弧の感受……………	一〇七
那覇日記……………	一三八
那覇からの便り……………	一四六
那覇に仮寓して……………	一五七

長田須磨「奄美女性誌」序文	一六三
「南島歌謡大成」推薦文	一六五
「沖繩歴史人物大事典」推薦文	一六六
新川明との出会い	一六八
川崎信一詩集略注	一七三
進一男「鶏鳴」帯文	一七五
藤井令一「シルエットの島」跋	一七五

Ⅳ

私も口ひげを!	一八三
今年の回顧	一八五
死火山の甦り	一八七
殿様湯跡界限	一八九
心に残る一冊の本	一九二
純心学園の思い出	一九四
「近代文学」と私	一九七

海のうねり	一九六
文学的近況——谷崎潤一郎賞受賞の言葉——	二〇五
終の住処	二二二
つるべ	二二六
湯船の歌	二二八
南の糸	二三三
私の近況	二三六
那覇に越冬す	二三八
風の怯えと那覇への逃れ	二三三
原作者からの思い	二三七
日本文学大賞受賞の言葉	二三八
散歩道の先取り	二三九

V

「南日本新聞新春文芸・短編小説」選評	二四三
「新沖縄文学賞」選評	二四六

「文芸賞」選評	二五
「群像新人文学賞」選評	二六
あとがき	二六
初稿発表書誌	二二

南風のさそい

想像力を阻むもの

想像力はどこから出るかを考えてみる。しかし想像力、と裸のままと言う習慣に不馴れだから、出だしを容易にするために、想像力という概念単語のまえに、自分のあるいは私の、という限定の言葉をつけ加えて踏み出すことにしよう。

自分の想像力ということになれば、その貧困に私は常に悩まされつづけてきた、という思いがまず浮かぶ。つまり自分の想像力の貧困を自覚しているのだが、もしその自覚の根を究明すれば、貧困を招来するところの想像力を阻むものが潜んでいることによりやく気づくことになる。

今まで私は自分の想像力が貧しいことを託^かってはきたが、その原因をさぐってみることは考えなかった。貧困は自分の貧困としてどうにもならぬことのように思ってきた。

つまるところその原因は私の気質あるいは体質であるかもしれない。否たぶん気質、体質のせいで、想像力一般についての筆を進めることにためらい、自分のなどという限定を必要とした

り、また想像力を阻むものを考えるにしても、内にまくれこんで行くことに傾くのかもしれない。しかしその方法でさぐるより仕方あるまい。

気質と体質は私に固有なもののあらわれ方の違いであるに過ぎず、根の存するところの状態はたぶん一つに相違ない。そしてそれは自分で選び変えるなど容易ではないという考えが私には根強くあるが、結論として私の想像力はこの二つに深くからみつかれていて、これらはあるときは想像力を鼓舞してくれても、また別のときには逆にそれを阻む原因ともなっているのである。

一体私の想像力はどこから来るのか。それを病巣をつきとめるようにつかみ出して見せることはできないが、それが心のはたらきの一つであることはまちがってはいまい。

つまり想像力は心から出てくるが、ではその心が何であるかということになると、私ははたと行き暮れてしまう。つかまえようと試みても逃げてとらえることのできぬもの、生きている限りはそれがあるらしいということは疑えないが、肉体をいくら精密に腑分けしてもそれとつきとめることはできず、また肉体の中のどこでどうはたらいているかはわからないが、そんなものは無いと断言することもできない、そのようなものとしてしか私は言い表わせないし、私にはそう写っているのだ。あるいは胸の部分のどこかに根拠地を持っているのかもしれないが、頭脳の方にも切り離せぬかわりが有りそうだし、そのほかの肉体のあらゆる部分にも、それ

はその痕跡を示すことがあるという現象も認めたいと思う。要するに肉体のどこを心が根拠地としているかは遂に知ることはできない。そのように、はつきりこれとつかまえることはできないが、われわれは心に明らかに支配されていることから免れられない。全くにんげんは心によって支えられていると言うしかあるまい。

しかし問題は、心はいつも正常のはたらきをしてくれるとは限らず、時には均衡を失ったはたらきを示すことが防ぎきれないという痛みを持っていることだ。

そもそも均衡を失う境界のところはなんと不確かな荒涼たる地帯だろう。低湿地帯の如くそこはかくされているが、うかと近づくとき足をとらわれてはまりこんでしまう。道路は明確にそこを避けて通っているわけではなく、もともとあやしげであるから、あらかじめそこを避けて通ることはまず以て期待し難い。

さて一旦心の均衡が失われてしまえば、そのはたらきにはぶく淀みはじめ、すべての生の色を褪せさせる。

先に想定した如く想像力が心のはたらきの一つとしてあらわれるのであれば、心が均衡を失ってそのはたらきをにぶらせれば当然想像力もそのはたらきが阻げられることは明白である。想像力はつまり私の文学の起動力であるから、そのはたらきがつまずけば、私の文学の単位イメージは、その生成を止めるか、少くともにぶく冴えないものにされてしまうのである。

右のことは想像力が宿命的に自らのほたらきの中に胚胎させている阻害の根源である。即ち心のはたらきの失速に影響されるという事態だ。従って私の想像力はいつも心の失速の不安にさらされていると言わなければならぬ。そしてその不安は甚だ根強いから、完全に克服することは至難事である。

但しある場合には全くその不安に巻きこまれることなしに、あるいは多少巻きこまれてもそれを意識することなしに過ぎ去る場合も少くないことに注意しなければならぬ。場合というより人といった方がより具体的かもしれぬ。その人は、おそらくこの根源的な何かに気づかないのだから、それは彼の想像力を阻んでいることにはならない。このことはその人にとって甚しく幸福な状態と言っているまい。（もっともそれが真に幸福な状態であるためにはもう一つ別な条件が作用しなければならぬ。その作用を受けることがなければ、むしろ不幸な状態を結果する危険にさらされている。）

之に反して、不幸な、と言わないまでもより面倒な状態は、その根源の不安に気づき過ぎている場合だ。

想像力の発動に際して（勿論想像力がある時刻を画して動き出すなどということは、たとえての事に過ぎないが）、心の状態にふと行き違いが混入すると、事態は拾収のつかぬ世界離れに傾き、のめりこんで行く。心にはかたちはないが、二枚の羽根の微妙な組み合わせだと考えて